

芥川だより

発行日***2019年8月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

梵

***** 一部200円です *****

夕立は突然やってきた



大きな雨粒が一つ二つ落ちてきた。樹々の葉っぱがしだれ乾いた砂が飛び散った。一息の静寂があたりを包み雨の匂いが満ち一瞬で太陽は消え雷雲が覆ってしまった。雨具を出す間もなく土砂降りになり全身ずぶ濡れになった。見晴らしのきくところであれば、空の雲行きで予想も出来たが、樹木に覆われた山道を急いで下っていたから気づかなかった。

この日に参れば千回参ったおかげがあるという千日参りの帰り途中である。例年ながら昼前から登り遅い昼飯を山上で食べみんなを下りて軽く一杯やろうと駆け下りていたのだ。愛宕神社から清滝への参道を半分ほど下ったところで予期せぬ大雨に会ってしまった。いくら猛暑で汗だくになった衣類といえども土砂降りの雨に叩かれると辛い。まして眼鏡をかけているので前が見えにくく滑りやすくなる。この参道は下半分が急で階段も多い。

集中豪雨のような雨模様になってきたが、どうすることも出来ず早く下りて着替えたい一心で早足で下り続けた。少し小降りになってきたので安堵しながら前を見ると大きな若い男の人が幼子を胸に抱えてゆっくりと歩いている。雨具もなく雨の中を平然と下っている。彼の後姿を見た時、私は感じるものがあったて歩く速度を落として彼の後を歩く。三歳までにお参りすると一生災難に合わない言い伝えで多くの子供連れに出会ったのだが、前を歩く父親から感じる堂々たる歩きぶりに感動したのである。父親の力強さ優しさを強く感じた。その時、ドイツ語の教本にあった詩人ゲーテの魔王に描かれていた挿絵を思い出したのである。夜中、病気の幼子を抱きかかえ馬で疾風の如くかけている時、子供が死神の妄想に取りつかれ病院に着いた時には亡くなっていた、という一場面である。

突然の大雨にあってもジタバタして子供に不安感を与えず、平然とした父親の姿は子供に大きな安らぎを与えているに違いない。魔王の子供は死神に取りつかれたが、前を歩く父親に抱かれた子は忘れがたい良き思い出になって父親を慕うだろう、と考えた。

死をめぐるあれやこれ(58)

参院選の後

石川 吾郎

七月の参院選の結果、改憲与党勢力が三分の二を割って、辛うじて改憲がすぐにはできない状態になったが、状況はなお微妙だ。というのもも野党にも改憲派がいて、与党はそれを取り込む目算をしているからだ。油断はならない。

この選挙で注目をあびたのは山本太郎の「れいわ新選組」だった。選挙前テレビでは全く無視をされていたが、障害者の二名が当選し政党要件を充たしたので、テレビでも取りあげられるようになった。しかしその紹介の仕方は悪意のあるものが多いのが残念だ。参院選後、「れいわ」山本太郎の街頭記者会見というイベントが東京新宿で行われ非常に大勢の人々が集まった(八月一日)。山本太郎が聴衆からの質問に答えながら、見解を述べるものだ。「れいわ」の主な政策は ①消費税廃止(法人税は累進制導入) ②最低賃金千五百円(政府が保証) ③奨学金徳政令 ④公務員増やす ⑤第一次産業戸別所得補償 ⑥「トントンデモ法」の一括見直し・廃止 ⑦辺野古真吉建設中止 ⑧原発即時禁止と、国民良識目線のもので極めてまっとうだと思われる。財源問題は、というギモンには法人税見直しとともに、政府の財政出動をする。「政府の借金はどうするのか」というお決まりの反論には「政府の借金破綻論」はMMTの理論を援用して、心配いらぬとする。(裏に続く)

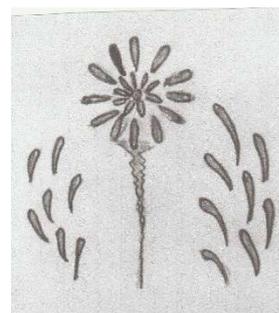
ユーチューブで「山本太郎 0801」で検索すると、この二時間あまりの集会の熱気に溢れた動画がみられる。

なおこの新宿の集会には、共産党の小池晃議員が一聴衆として参加をしていたという。改憲阻止、国民生活を第一にする、真の野党共闘を来る総選挙では後押しし、盛り上げようではないか。

芥川だより一五二号 目次

ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳	坂本一光	2
哲学者の時事放談	祖蔵哲	4
大峰奥駈道	下村嘉明	6
大人の今昔物語	石川吾郎	7
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	9
オクラの山たより	因了生	10
隠された歴史	満田正賢	14
道をゆく4 山辺の道	成瀬和之	16
「我がおくのほそ道の旅」	成瀬和之	17
孫ウオッチング	福田圭	17
編集後記	嘉	18
ふみの道草	山椒魚	19
	土田裕	19
俳句	影山武司	19



素老人☆よもだ帳 (65)

坂本一光

◆改憲は無理と内思い知り
あの人もそう思い知ったはずである。

先の参議院選挙において、自民党は議席を減らし単独過半数を割り込んだ。公明党を加えた与党全体では過半数を確保したものの、維新などを加えても、今回改憲勢力は三年前に達成した「三分の二以上の議席」を維持できなかった。全国十二の一人区で野党共闘が実現し、その共同候補が十選挙区で勝利した衝撃はあの人にも大きかったであろう。あの人はいくら改憲の旗を振り強気の発言を続けても、改憲に賛成は反対よりも明らかに少数であり、九条改憲についてはなおさらにならざるを得なかった。国民は今なお、先の大戦の惨禍を忘れておらず、今ここにあり平和を失ってはならないとする決意は固い。奇しくも七月二十六日の朝日新聞

『天声人語』は、そのことをよく伝えていた。素老人が住む大分県の、過疎の田舎町が経験した戦争中の出来事である。以下に全文を紹介する(本紙の縦書き表記に合わせて編集し、仮に表題を付した)。

ヘイタイもコメもデンキも出して過疎

こんな嘆きも聞こえてきそうな、大分の田舎町が『天声人語』の話題になることなど二度とないだろう、とは古老の話。

【天声人語】 語り継ぐ被弾木

本紙東京本社版の「声」欄で昨夏、「小さな駅の被弾木」という投稿を読んだ。大戦末期、大分県内で米軍機が列車を銃撃し、乗客や駅員ら大勢が死傷する惨劇があったという内容で、投稿主は八十代の男性。「戦争の恐ろしさを語り継がねばならない」とある▼

訪ねてみると、被弾木は大分県豊後大野市の朝地(あさじ)という無人駅に立っていた。三本のこけむしたカイズカイブキ。真新しい説明板によれば、

終戦まぎわの七月三十一日の昼、米軍による銃撃で十二人が死亡、四十人が負傷したという▼「当時のことを覚えているのは七十代より上くらい。単なる老木と思いきや、伐採されないよう、一昨年、木に札をかけ、説明板を立てました」。地元ボランティア団

体「朝地あそぼ会」の朝倉秀康会長(七十五)は話す▼住民の記憶によれば、米軍三機が旋回し、駅に着いたばかりの鈍行列車に超低空から機銃掃射を浴びせたという。「駅舎も狙われ、駅の倉庫に逃げた人も撃たれました。反撃されるおそれがない中、米兵の腕比べか遊びだった気がしてなりません」▼(飛び降りし列車撃たるる音烈(はげ)し烈しき遊び敵遊びあり)。この事件に遭遇した男性の渾身(こんしん)の一首である。千葉県内に住む親族から、昨夏、関連投稿として「声」の欄に寄せられた▼多くの人々の記憶にある戦史ではないものの、二編の投稿に接して初めて被弾木の存在を知り、戦争の残酷さの一端をありと感じた。幹を仰ぎ、無数の銃弾を帯びたまま生きる古木の苦しみを思った。

このことについて素老人は、すでに『芥川だより』(二〇一九年一月一日発行、角川)に詳細な紹介をした。合わせて参照されたい。

◇自分のことすら知らない男を、町の誰もが希望と呼んだ―

これは、映画『マジエスティック』公開時のキャッチ・コピーである(二〇〇一年アメリカ映画、フランク・ダラボン監督、ジム・キャリー主演)。五月に民間BS放送で観たこの映画のシーンを、

参議院選挙の結果を見ながら素老人は思
い出した。

舞台は赤狩り全盛時のハリウッド。駆
け出しのB級映画脚本家ピーター・アプ
ルトンは、学生時代に女の子目当てで参
加した集会在共産党の集会であると問題
にされ、映画作りから外される。やけ酒
をおり飲酒運転、橋から転落、記憶を
失い見知らぬ町ロソンの人に助けられ
る。「戦死したはずの町の英雄ルークが
帰って来た」、小さな町は湧き立つが、
やがてピーターの記憶が回復、瓜二つの
別人とわかる。

町の英雄ルークは二度死んだのだが、
彼は再び生き返る。その次第はこうであ
る。

ハリウッドから行方不明となり搜索し
ていたFBIの手は、遂にピーターに及
んだ。非米活動委員会の聴聞会に出席す
る前、映画会社幹部とピーターの会話。

「今日一日弁護士と掛け合って何とか手
を打たせた。委員会は渋々ながらも君を
シロと認めそうだ。連中は振り上げたこ
ぶしの下ろし所を探している。弁護士が
用意した書類だ」「私、ピーター・アプ
ルトンは今までの過ちを正すべく、ここ
に共産党からの離党を宣言し、私と同じ
過ちを正すよ

「お決まりの文書、名前のリストもある」
「赤の他人だ」

「構うもんか、すでに誰かが売った名ま
えだ。声明文を読み国旗に敬礼しさえす
れば一件落着だ」

「最初から無実だ」
「今さら混ぜ返すな。これはゲームだ。
だが連中は（このゲームの）親だ。連中
のルールに従わねば潰される」

「民主主義の国だろ？」
「独立宣言か？ 合衆国憲法か？ サイ
ン入りの単なる紙切れだ。何と同じだと
思う。契約書さ。状況に応じて内容は変
わる。今回は非米活動委員会が好き勝手
に内容を変えたが、次は違う誰かが同じ
ようなことをする。元に戻りたきゃ、声
明文を読め」

聴聞会に向かう列車の中、ルークの恋
人アデルから渡された「アメリカ合衆国
憲法」を開くピーター。本の扉にはルー
クの言葉、「アデルへ、答えはここに、
ルークより」とある。本にはルークの手
紙も挟まれていた。

「愛するアデル。じき戦闘に入りそうだ。
しばらく便りはできない。手紙がありが
とう。勇気づけられたし懐かしかった。
君には言っておく。僕は死ぬ覚悟をして
戦闘に入る。もし僕が死んでも悲しまず
に前へ進むと約束してくれ。僕の分も精
一杯生きてほしい。僕らの戦いをムダに
するな。悪が力をもてば犠牲をいとわず
叩き潰さねば。単純な論理だが命を懸け
る価値がある。怖いのは任務の失敗もだ
が二度と君に会えないこと。僕らの子の

成長も見られない。一緒に年を取ること
も。だがたとえ死んでも僕は君のそばに
いる。もし春の日、君が外を歩いていて、
そよ風がほおをなでたら、そのそよ風は
僕のキスだ。忘れないでくれ。愛してい
る、ルークより」

いよいよ聴聞会の日が来た。ラジオで、
テレビで、その様子に見入る町の人びと。
弁護士は言う、
「道は二つだ。声明文を読むか、侮辱罪
で投獄されるか。読めば助かる」
「私、ピーター・アプルトンは、今まで
の過ちを正すべく……」
しかし、遂に、彼はその続きを読まない
決断をする。

「すみません。でも問題は、僕が共産党
員かどうかと違う。どう説明すればいい
のか。正直言つて、僕には信念というも
のがない。必要と思えなかつたし、本当
を言えば信念を持つだけの勇気がなかつ
た。だがルークは違う。信念と勇気があ
つた。面識はないが知人の気がして、ず
つと考えていたんです。もし彼なら何と
言うだろうと。たぶんこう言うでしょう。

僕が命懸けで守ろうとした国はこんな国
じゃないと。あなた方が示すアメリカは
冷酷で度量が狭いと。彼の思うアメリカ
は大きな国です。心が広くて誰もが自由
に意見を発せる。不都合な意見でも。彼
がここにいたら何と答えますか。彼の愛
する国に何が起きたと……。皆さんはご存
知でしょうか。憲法は以下を禁ずる。議

会は国教の樹立……もしくは信教上の自由
な行為を禁止する法律の制定、または言
論及び出版の自由、平和的に集会する権
利、国民の請願権の制限。この憲法修正
第一条はアメリカの基本理念です。国民
が国と交わした最も大事な契約です。た
とえこの憲法や修正箇条という契約がた
だのサイン入りの紙切れでも、それは身
勝手な都合による変更が許されない唯一
の契約書です。議長にも、捜査官にも、
誰にも変えられない、これを守るため多
くの血が、たとえばルークやロソンの
若者たちの……僕の言いたいのはただそれ
だけです……」

ピーターの陳述はロソンの町の人た
ちの心に沁み入った。木槌を叩きながら
議長長の叫ぶ「席に戻れ」の声を無視し、
傍聴人たちの割れるような拍手と記者た
ちの無数のフラッシュの中をピーターは
委員会から退席。そしてロソンの町に
再び帰る。彼が到着した駅には、彼を迎
える町の人たちの喜びがあふれ、「お帰
りピーター、ロソンの息子よ」の横断
幕も待っていた。

なお、『マジエスティック』は、ルー
クの父親が息子（実はピーターであつた
が）の生還を喜び、彼や町の人たちと共
に再興させた映画館の名である。その意
味は威風堂々。それは聴聞会におけるピ
ーターの姿でもあつた。
参議院選挙の結果を受けてもあの人は
なお、虚勢を張っている。暴走の危険は

少しも去っていないが、冒頭に言ったとおり、あの人も改憲は内心無理だと知ったはずであることに確信をもちたいと思う。

（かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人

哲学爺いの時事放談（15）

祖蔵 哲

自由の概念からみた「保守と革新」の哲学

2019年の参院選が終わった。今回の選挙の最大の特徴は44.8%という、1995年の44.5%につぐ投票率の低さである。大切な国民の権利である参政権、選挙の投票率は毎回低迷している。国民の政治への関心が薄れて来ていると一般には分析されているがそれはそうであろうか。もし、そうであれば原因は何でその責任はだれにあるのか。今回の選挙での推測される政治的無関心の原因は「選挙の論点の不毛」、「長期政権への諦め」、「対立野党の不在」など様々に分析されている。これらの要因は結果的に政権与党に有利な方に働いた。棄権も含め、自分達にしか選択枝がないような消極的賛同を獲得するような彼らの巧みな戦略

であるように思う。例えば、今回の選挙論点である消費税の10%上げにしても、本来「上げない」すなわち「8%のまま」というのは現状維持で「保守的」考え方であつて、将来の財源確保のためには「2%上げる」というのは「革新的」な方向である。だから「消費税10%賛成」は革新的な考えになり政権はうまくその「保守性」を隠せることになる。

（1） 保守のねじれ現象

この「保守と革新」の概念のねじれは重要な世代間での政治的選択のキーポイントになってきている。「消費税値上げ賛成」も「憲法改正賛成」も現状改革という「革新性」では共通する。言われて久しいが、現状維持すなわち「既得権層」の保守性は格差社会での弱者の攻撃対象になっている。アメリカでありえないと思われたトランプ政権が誕生したのはこれである。忘れ去られ、放置され、差別されている底辺層は「維持—保守」ではなく「変化—革新」を求めているのである。ここでは「保守の逆転現象」がおきている。既存野党勢力はこの認識が欠けているから格差社会の圧倒的多数である底辺層の同意が得られないのであると思われる。最近の世論調査によると、若者の自民党支持層が増加しているという。さらに驚くのは若者がもつとも保守的な政党としているのが公明党、ついで共産党、自

民党は中道、最も革新的なのが維新となつている。ソ連邦崩壊以後、共産主義の崩落によって冷戦体制は終わり、政治の「右翼—左翼」対立は「資本主義—共産主義」という対立項から資本主義という枠内で「維持—改革」「保守—革新」へと変化したが、今やその「革新」自体が「保守」に吸収され逆転しているのである。旧世代である既得権層は歴史上初めて生じてきたこのパラドクスは真底に理解できない。

もう一つの論点「年金問題」もその財源をどこに求めるかによって「保守—革新」は逆転現象をおこす。すなわち、もともと年金すら満足にもらえる見込みのない底辺層にとつて、既得権者の年金維持は既得権保守であり、それを減らす、つまり限られた財源の中での配分の問題になってきている。よつて既得権層の年金カットが彼らにとつての革新である。国家の財源が縮小する原因は将来の「少子化」であり、人口の逆ピラミッド構造への変化である。これは一人日本だけの問題ではなく多くの先進諸国の問題でもあるが、よつて解決策は労働人口対策と財政支出バランスになるはずである。しかし、今回の選挙でも、それらの論議は焦点になっていない。現在取られている政策は「急場しのぎの外国人論、労働力の輸入」と「既定的軍事費増大と必然的福利厚生費縮小バランス」のみである。現政権がこのような単純な政策でも維持でき

ているのは一重に国民全体が「現世利益理念」つまり、「今さえよければ」「他よりまし」であるという考えに馴らされているからだ。実態経済を反映していない金融緩和による高株価政策や「打ち出の小槌」の国債発行はいつか必ず悲劇を生む。最近「反緊縮」というケインズの積極的財政経済理論が出てきているが、その方向が「現世利益」や軍事費に使われるのなら悲劇の結果は同じである。それらの不満や不安に目を逸らし打ち消す方策はいつの世でも「政治による経済、文化への関与、支配」である。それらは今や現実化されている。「国威発揚としてのオリンピック」や「政治的保護主義経済」である。これらの究極的解決先が「戦争」になることは有史以来、歴史が証明している真実である。このような愚かなことを未だに繰り返すのが人類の宿命なのであるうか。

（2） 保守の対立から「保守—リベラル」の対立へ

さて、こういった最近の政治思想上の「保守と革新」対立概念の混乱からか、革新という言葉は「リベラル」に置き換えられることが多くなった。あらたな対立概念である「保守—リベラル」の登場である。ここから哲学的な手法、つまり概念を分析することによって現象の原因を解明

するという手順をたどってみよう。

まず、保守とはなにかである。『保守とは、従来からの伝統・習慣・制度・社会組織・考え方などを尊重し、革命などの急激な改革に反対する社会的・政治的な立場、傾向、思想などを指す用語』とある。政治的用語としての「保守」が生まれたのはフランス革命が契機である。保守は従来の王政を支持し、「改革」は革命の理念である王政権力からの解放「自由」を求めた。ただし、その後フランス革命は急進的な勢力が恐怖政治を実行したためナポレオンという独裁政治を許す事態になった。そのため、保守は概念的には緩やかな変化は認める立場にもなっている。もう一つ「保守」について留意しなければならぬ点は、『従来からの』という過去の歴史観の立場の違いである。過去の歴史観といっても様々な立場があるはずである。主にそれは主流、支配層の歴史観や立場を指すのであろう。ということは日本の現政権、保守党のリーダーが『戦後レジームからの脱脚』と言っているのは「戦前」を「保守」する、すなわち戦前に戻ると言っていることになろう。しかし、この言葉を「革新」と捉えれば、少し違う歴史観を示すことになるが。

(3) 「自由リベラル」概念の多様性

①自由の程度―やりたい放題？

さて一方の「リベラル」であるが、フランス革命での「1789年」人間と市民の権利宣言」はこう記している『自由とは、他者に害をなさぬあらゆることを行うことができるということである。よって、各人の自然権の行使には、それが社会の他の人々が同じ諸権利を享受することを保証するもの以外には限界がない。こうした限界は法によってのみ決定される。』このフランス革命の自由という言葉は日本語では厳密に定義できない。日本語でいう自由は勝手気ままという意味があるからだ。しかし、このフランス革命で宣言された自由はその意味ではなく、束縛からの解放という自由である。それが「リベラル」の原意である。しかし、この「リベラル」概念にはフランス革命以前にすでにいくつかに種類があった。宣言の内容はイギリスの政治哲学者、ジョン・スチュアート・ミルが「自由論」(1859)で述べた「自由制限の危害原則」に影響されている。イギリスは「1789年名誉革命によっていち早く王権を制限した国であり、市民の自由概念は育成されていた。しかし、一方は同じイギリスのアダム・スミスは「国富論」(1776)で経済活動における国家の介入を批判し、制限のない自由放任(レッセフェール)を説いており自由にはフランス革命以前からさまざまな概念があったことが分かる。この議論は自由の度合い《程度の議論》であり「絶対自由、無制限自由か制限的

自由か」である。後者は日本語の勝手気ままに近いが、スミスによると「神の見えざる手」が介入して丁度好い加減に落ち着くのだとか。

②束縛からの解放だけの自由からさらに人間の本来性を実現する自由へ

もう一方の自由概念議論が(くからの自由)か(くへの自由)という自由の《方向性の議論》ある。個人の「国家社会からの自由」は「消極的自由」と呼ばれ、個人の「潜在能力実現への自由」は「積極的自由」と呼ばれる。「消極的自由」は他者の権力に従わない状態、他者の強制的干渉が不在の状態を意味する。例えば信教の自由では政府が国民個人の宗教活動に干渉しないと規定(国家からの自由)するように、消極的自由は他者の干渉が物理的に無い範囲を規定する。一方、「積極的自由」は、自己実現や「能力」によって規定される概念であり、人間には平等に自己の意志を実現しうること、能力のあることが前提となっている自由である。自己の行為や生が自己の意志や決定に基づいているかどうか、自己自身を律しうる自立した状態にあるかどうかという観点から見た自由である。そのような基づいていることが自由、そのような肯定的な状態にあることが自由なのである。つまりこの「積極的自由」とは人間の基本的な人権を実現するための(社会による)自由の保証を意味している。その意味から貧富の格差の存在する社会において、

それを解消し、社会権(国家による自由)を実現するために、政府が富者から高額の税金を徴収し、貧者に分配することや、一般に社会的弱者に分類された人々に対し、教育や就職などでより多くの機会を与えることにより社会的な格差を解消しようとする行為(これをアフアーマティブ・アクション「肯定的行為」という)も、自己実現が困難な疎外された立場にある者の自己実現を容易にするという点で積極的自由の実現と考えられている。これこそは本来フランス革命の中心思想であるルソーの「人間平等起源論」にも近い。しかし、率先してこの「アフアーマティブ・アクション」を導入している米国での最近の状況はこれが「逆差別」であると「既得権者」からの猛反対にさらされている。状況はこうだ。米国では歴史的に黒人差別が長く続いており、それが個人の能力の発揮を妨げてきた。これを解消するとして人口比率に従い、大卒入学枠に一定の黒人枠を設けた。しかし、これによって、同等の能力のある白人が入学できないということになる。国家や社会の歴史的過去を現在の個人が責任を負わなければならないのかという、個人と国家、社会の歴史問題に発展している。

「消極的自由」は自由に対する権力の干渉を制限することを意味する。しかし、「積極的自由」は逆に権力の介入を求めることになる。ここにも「自由リベラ

ル」の逆転現象がみられる。なるほど権力の介入といってもその内容は異なるのであるが、前者の介入は強者の抑制、後者の介入は弱者の救済といった、どの階層を抑止し、また支援するかである。この思想の背景には人類の歴史が強く反映されている。つまり、人間は本来平等にうまれてきたのであるが徐々に歴史遍歴によって恣意的な不平等がうまれた、これは個人の責任によっておこったものではないという歴史観である。

(4) 自由概念の双子「リベラルとリタリアン」の対立

ここで「自由」の概念を再整理してみよう。「自由」概念は西欧の歴史からみて最初は宗教や王政権力からの解放、市民の自由であった。それがだんだんと人間の個人的な自由で個別化されていった。自由が個別化されるに従い、個々、個人間の争いが表面化してくる。そこで逆に国家や権力による制限がまた求められるようになったのである。だからして、自由の概念もまた、歴史的にどの段階を重視するかによって立場が分かれる。完全自由主義、完全平等主義、一部制限主義などである。しかし総括してこの自由概念は「リベラル」と呼ばれてきた。歴史的に近年までは自由一部制限主義であったが、しかし最近では規制が多い既存の体制を変革し完全自由主義、つまりア

ダム・スミスの経済原理を基本とすると完全自由主義へ帰れという「リバタリアン」が目立つようになった。されにこれは、ベンサムの結果がよければそれが正義であるとする功利主義が結びついて「新自由主義」という自由概念の哲学的正統性を主張する価値概念にもなっている。完全自由主義は個人以外のあらゆる介入を拒否するから、責任問題に關しても「自己責任」という立場を貫く。

それが制限的自由主義者の行動であつてもそれを求める。なぜなら同じ国家や共同体では自分たちも税金という形で介入に参画しているという意識があるからだ。さらに複雑になるが、「共同体主義」ユニタリアン」というのも出てきた。これは、個々の集団単位内の独立的自由を重視する立場である。しかしこの単位の幅は大きい。それこそ村落共同体か一国家まで。おだやかな郷土愛主義。パターナリズムであればよいが、国家主義ナショナリズムまで行くとまた問題がでてくる。しかし、これもまた自由という概念から出てきたものである。自由概念はいかに広い内容を持つものであることが確認された。

このように見えてくると「自由」という概念は「人間とは何か」とか「歴史はいかにして作られたか」という「歴史哲学」の領域に入ってくる。つまり問題は、私たちは現在の状態すなわち哲学的「現実存在」をどのように考えるかであ

る。これらを知らなくては、中間層は「既得権を守れ」というだけだし、底辺層は「まだ底辺がいるからマシ」「既得権を改革せよ」という、これに乗じてすでに十分富を蓄えた支配層は「底辺層と中間層はお互いに競争せよ」「国家による平等支援の必要はない。自由競争することが発展だ。規制を撤廃、改革しろ」となる。

このように「自由概念の無知」によって「底辺層」と「支配層」は結びつく。しかも近年、「格差の拡大」によって「底辺層」が増加している。なぜ「底辺層」は「保守」になり、自分にとつて敵であるはずの「支配層」と結びつくのか。ここに秘密が隠されている。これは現代の病理でもある。

仏教で「無知、無明」は苦しみのなかで、迷いの中にある者が解脱できずに、輪廻転生する様子を示す様子を因果関係「十二縁起」の第一原因とされるものだ。この「無知」からくる病をどうしたら取り除くことができなのか。これも同じく仏教にヒントがある。「八正道」の一つ「正見」である。「正見」とは正しく知ることである。生活が苦しい、世の中が生きづらい、社会が少しも良くならない、どこに原因があるのか。周り比べてもダメ、強者にすがってもダメ、自分を見つめる、自分で正しく考える。今こそ哲学が必要であらう。

大峯奥駈道 26

下村嘉明

南奥駈道を再興しようといわれ始めた前田勇一さんは、2百人ほどを抱える工場を経営されていたのですが、その会社もやめ奥駈道に猛進された想いを想像しても、私には狂喜としか思えない。

誰も通らなくなった敷山に道をつけて維持をするなんてことは常人では考えもつかない事である。

しかし、また別の想いもある。それは、私の経験から、だれも考えていないだろうと空想している事を世界の中で凡そ10人は同じようなことを考えていて、8人は考えるだけなのだが、残る2人は実際に行動に移すという推測である。

この推測は、ヒマラヤの登山計画の際に経験し世間一般にも通用するんじゃないかとおもっている。自分以上に真剣に全力で私と同じことをする強力なライバルが私の知らないところで現れているのである。

少し話がそれるが、8対2という割合には妙に心が動かされる。亡くなった山の先輩である田中さんが、私によく言っていたからである。田中さんは、かなりの変人と周りから見られていたのだが、どういふ訳か知らないが、私と妙に馬が合った。

田中さんが、ある時、蟻をじつと見ていたら、2割の働きバチは頑張つて働いているのだが、残りの8割の蜂はさぼっている、という話である。そして2割の働き蜂ばかりを集めても、やはりその中で頑張つて働くのは2割だと言った。

これも蛇足だが、アメリカの戦車が川を渡る時に考えた方法は、数匹の蟻が互いに尻尾をくわえてブリッジを作ることからヒントをえたとも言っていた。

こんなことから、8対2は私の頭に残つてしまひ世間を考えるベースになつてしまつた。

女の子にもてない偏狭さが入っている私の考えだから適当に聞いてほしいのだが、私の育つた田舎の学校でも2割ぐらいのモテル男がいた。その他8割の男であつた私は、まるで女に縁がなかつた。女の子も同じように2割ぐらいのモテル女の子がいた。

人生で女の子にモテルかモテないかは非常に重要な問題である。学校でも職場でも女心をつかむか、嫌われるかで人生は変わる。結婚となれば更に決定的な問題になる。

ところが、世間ではこのような話はないし話題にすらならない。親しかったある店主に問いかけたら、そんなこと考えもしなかつたと馬鹿にされたが、根気よく私の考えを説明すると、お前、よう

そんなことを考えるなあ、と呆れたように言つた。

私は、「お前は恵まれすぎているから、気が付かんのや」まあ、よう考えてみな、世の中不平等やで？

毎日顔を合わせる梅ちゃんは、本当に恵まれた環境で育ち何不自由なく暮らしているように見えた。裕福な商人の家に生まれ容姿も頭もよくて女にもモテたから、それが当たり前のように感じているから、そうじゃない8割の男のつらさを全く理解していなかつた。

誰でもそうだと思うが、自分を中心に物事を考える。自分の置かれた状況が世間一般の状況だと感違えをする。上を見ても下を見てもキリがないから、当然とも言へば当然なのだが、自分と全く違う環境下にいる人の事を想像だにしない人が多い。その必要性がないからかもしれないのがその理由だろう。

梅ちゃんは、裕福な育ちだから、美食家で美味しい店もよく知っている。幾度もご馳走になつたが、料理の美味しい事、きつぷがよくおごってくれる事、細やかな気遣い。しゃべりは落語家並みで人を飽きさせない。何でも、小さい時に爺さんが映画好きで毎日映画館のはしごをしたそうで、ほとんどの映画を見たらしい。

商売も小さい時から見て育つたので商売のDNAが備わっている。親父さんが賢明な人だったので、変に受験勉強をさ

せず普通の大学を卒業したので、頭が高いこともない。

彼の姿を見ていて、跡取りを育てる方法はこういう事なんだと感じた。

田舎の私には、これまで経験したことがない世界を梅ちゃんは教えてくれた。商人の基本的な心得、金についての心得、そして何よりも女について色々教えてくれた。

女について教授を受けた友人は二人だけである。高木さんと梅ちゃんだけである。高木さんも目の前で女の口説き方を実演して見せてくれた。映画のように、見知らぬ人に声をかけて口説き落とした手品師か。ペテン師かと思えるように彼は演じた。

高木さんや梅ちゃんは必ず気の強そうな美人を狙う。ツンとした美人に興味をそそるらしい。誰もが振り向くぐらいの美人である。

梅ちゃんも私によく言つた、「あんたも出来るよ、プライドを捨てて馬鹿になればね」高木さんにも同じようなことをよく言われた。私には、へんなプライドというかコンプレックスがあつて、彼らのように普通に女の子と話が出来ない。身構えないとできなかつた。それでは女の子にはモテない。

さりげなく、普段通りに優しく接してお金は財布ごと渡すぐらいの器量を見せガツガツして身体を求め代わりに狸寝入りか酔つ払つたふりして寝込んでしま

ぐらいの余裕ある態度である。誰彼無しにやつてはいけない。

大人の今昔物語(59)

石川 吾郎

今回は、険しい山に毎日登る老婆の不思議な行動。舞台は中国です。教科書に出ない度は一／五。

老婆が日毎に見る卒塔婆に、血が付いた話し(巻第十・第三六話)

今は昔、唐土(もろこし)の某の帝の世、某という所に大きな山があつた。その山の頂に一つの卒塔婆があつた。その山の麓には、一つの村があり、その村に一人の老婆が住んでいた。年は八十ほどであつた。

この老婆、日に一度必ずこの山に上り、頂の卒塔婆を拝んでいた。大きく高い山だったので、麓から峰に登るほどに道は険しく、登るに苦しく遠かつた。それでも老婆は雨が降つても気にせず、風が吹いても止めず、雷が鳴つても恐れなかつた。また冬、寒さに凍り付くほどになつても、夏の暑さが耐え難いときにも、一日として欠かさず、この卒塔婆を拝み続けた。こうして長年が経過した。

人々はこの老婆の姿を見て、強いてその理由を知ろうともせず、ただ卒塔婆を拝んでいるのだと了解していた。真夏の

暑さが厳しいころ若者たちが幾人か、この山に登り卒塔婆の根元にしゃがんで涼んでいると、腰が重なるほどに曲がり、杖に寄りかかったくだんの老婆が現れ、汗を拭きふき卒塔婆にたどりつき、その卒塔婆の回りを巡っている。この様子が不審に思えたので、また再々この姿にも出くわしていたので、涼んでいたこの若者たちは「このばあさんは、何のつもりでこんなしんどいことをしているんだろうか。今日も来たらこのことを訊いてやるう」と言い合わせていた。するとやがて、いつものように老婆が這うように登ってきたのだった。

この若い男たちは、老婆に向かって尋ねる。「ばあさんは、若いもんが、涼むために来るのでさえ苦しい道のりを、何のためにこうして来るのかい。涼もうといつても、涼むこともなく、かといって他に何かしているようにも見えない。年をとった身で毎日登ってまた下りていく。不思議でならん。このわけを教えてくださいまいか。」

老婆が答える。「このごろの若い者は、何でも不思議がるものよ。こうしてお山に登り卒塔婆を見ることは、近頃始めたことではないわい。我れ物心ついたころに始めてから、もう七十年あまり、毎日こうして登っているのじゃ」と。

男ども「だから、その理由を教えてくださいよ」老婆「わしのてて親は、百二十

まで生きて、死んだ。おじいは百三十で死んだ。またわしの祖先は二百余りで死んだ。その祖先の言い伝えることには、『この卒塔婆に血が付いたときには、山は崩れて深い海になる』と、てて親が言い残してくれた。わしらは麓に住む身であれば、山が崩れたなら押しつぶされて死んでしまうじやろう。もし血が付いていたら、すぐに逃げようと思い、こうして毎日卒塔婆を見ているのじゃ」

男たち、これを聞いて老婆をバカにして笑いながら、「おお恐いことじゃ。崩れるときにはわしらにも知らせておくれ」などと云って、笑いあうが、老婆は自分が笑われているとはつゆ考えず、「もちろんとも。自分ひとりが助かろうなどとは思ってはおらん。教えて進ぜる」と言いながら、卒塔婆を一巡りして調べて、また山を下りていった。

この後、この男たち「あのばあさんは、今日はもう来ないだろう。明日になればまた来て、この卒塔婆を見たときに驚かせて、笑ってやろう」と、示し合わせて血をしぼり出し、この卒塔婆に塗りつけた。引き返すと、この男たちは里の者たちに事情を話した。

「この麓のばあさんが、毎日山に登り、頂の卒塔婆を見ているのが怪しいので、この訳を訊いてみたら、しかじかと話したので、明日にはびつくりさせて走らせ

ようと、卒塔婆に血を塗りつけて下りてきたって、訳なのさ」。里の者たちはこれを見て「さぞ崩れることだろうよ」などと大笑いに笑いあった。

翌日くだんの老婆は、山の頂に着いて卒塔婆を見ると、血が濃く着いている。これを見て老婆は倒れるほどびつくりして、里まで走り帰って叫んだ。「里の人よ、早うこの里から逃れて命を助かってください。この山はいまにも崩れて深い海になってしまふ」。里じゅうに知らせ回ってから、老婆は家に戻り、子や孫に家財道具をみな背負わせて、この里から避難をした。

これを見て例の血を付けた男たちは、笑い合っている。が、そうするうち何となく、あたり一面がざわめき大きな音が響きわたった。「風が吹き出した音が、雷が鳴るのか」と怪しんでいるうちに、空は急に真つ暗になり、何とも怖ろしい気配になってきた。

そしてこの山が動きはじめた。「こ、これはどうしたことか」と叫びあっているうちに、山体はどんどん崩れてくる。このとき「ばあさんの言っていたことは本当だったんだ」と言って、たまたま逃げおおせた者もいたけれども、親の行方も分からず、子どもの姿を見失う。

ましてや、家財を持ち出すことはできず、大声を上げて叫びあった。

ただこの老婆だけが、子や孫を引き連れて、家財道具の一つも失うことなく、前もって避難をして、他の里で平和に暮らしたということだ。このことを嘲笑した者たちは、逃げられずに、すべて死んでしまった。

というわけなので、年寄りの言うことは、重んずるべきである。こうして、この山は皆崩れて海になった。まことに驚くべきことであつたと、語り伝えられている。

《コメント》

この話は、災害の多発する現在の日本では笑い話ですまされないように思いますが。

大地震やそれに続く津波、火山の大爆発、といった災害は、近い将来に起こることであるとされています。数百年に一度といった頻度で起こる地球物理的な災害では、古記録や言い伝え、石碑などの記録が貴重な経験を伝えるものとなることが知られています。

「山が崩れて海になる」ということも、わが国では、江戸時代の雲仙の大爆発で、山体が海に崩れて、大津波が起り、雲仙・熊本に大被害がでた記録もあります。また、関西・東海にかけては、あと二十年以内かなりの確率で、南海トラフ大地震が起ることが予想されており、これには大津波が確実に伴います。こうした自然災害への備えを、日本という国は

必要としているのです。こう考えると原
発などほもつての他です。現在の政府の
姿勢を問う必要があります。

B級サラリーマン渡世譚(73)

明石 幸次郎

韓国編(担当者の役割 26)

K田部長が「仕事の話は抜きだ」と言
つても、サラリーマンは酒量が増えれば
話題は、自然に“会社、人、仕事”のこ
とになる。→君の最近の言動が話題にな
り、その言動が組織の規範の枠をはみ出
すようになり、H川の話では、何らかの
ペナルティを課しないと、組織として示
しがつかない様になって来たと言う話し
であった。

T君が、自分の言い分が通らないから
と言つて、拗ねて会社を無断欠勤するな
どは、社会人として、許されることでは
ない。しかし、自分が営業マンとしての
存在感を示す為には、H川グループが扱
っているような競争力のない製品を販売
して、実績をつけるには、工場が認める
当たり前のことをしていたら、注文は取
れないことは、分かりきっている。

T君が常識破りの無理な条件を、社内
に認めさせて受注しようと動いたのは
自分の存在を示すためもあるが、3年
目の血気盛んな社員であれば、じっとし
て指を食わえて最初から諦めるよりは、

T君のような神風特攻隊的行動に出るの
も分らないことではない。欠勤という
行為は別として、受注したいという、止
むに止まれぬその気持ち、エネルギーは
良しとして、どこかで認めてやっても良
いのではないか、もしそれが駄目であれ
ば、それを上司が受け止め、仕事への情
熱を違う形で発揮させるように誘導なり
指導ができないものかと、明石は二人の
話を聞いてK君に同情の念を少し持った。

店の開きのドアが勢いよく開き、暖簾
を潜り、大男が額に汗を掻きながら「K
田部長！遅くなりまして、すみません」
とT田が入って来た。

T田は輸出部の生え抜きの、将来の幹
部候補生と周りから言われるA級サラリ
ーマンである。明石より入社が1年先輩
で、アメリカに駐在していて、今は、業

務報告の為に一時帰国をしている。

T田は、海外で一番大きな市場のアメ
リカの最前線で活躍し、業績を上げてい
るようで、自信に満ち溢れた顔で明石の
横の席に座るなり「ああ、H川さん、ご
無沙汰しております、おー君が明石君か、
宜しくな」と言うなり「お母さん！ビー
ル2本、お願いします」と大きな声でビ
ールを注文した。

「Tちゃん、帰国早々に会議、ご苦労
さん。まあ、熱燗で一杯行こう」とK田
が酒をすすめて、「ところで、アメリカは
好調なようだが、何が要因や？」と問う
た。「二つは、景気が良い事です。二つ目

は、販売網を増やし、新製品のキャンペ
ーンを行い、性能の良さを理解してもら
い、それでブランドが浸透しつつあるこ
とです。三つ目は、クレジットの導入で、
買い易くしたからです」と明確に答えた。
「そうか！これからも、アメリカは最大
のマーケットで会社の期待度も高い。T
ちゃんも責任が重いなあ。反面、遣り
甲斐があるわなあ。頑張ってくれよ」と
言いながら酒を注いだ。

おかみさんが、ビールと刺し身を持つ
て来て「あら、Tちゃん、お久しぶりや
ね。アメリカに行っているんやて。向こ
うで活躍されて、エライ貫禄が付き、男
ぶりも上がったやんか。やはり、男はん
は、仕事がよく出来る人は、顔にも自信
が出てきますなあ！」とK田の方を向い
て、T田を褒めた。

明石は運ばれてきたビール瓶を持ち、「
田にビールを注いで、改めて乾杯をした。
」

「ところで、明石君は、誰に仕事を教え
て貰っているの？」と聞かれたので「M
居さんです」と答えたら、笑いながら「そ
う、私も新入社員の頃は、M居さんが指
導員で、大層しごかれたよ。それで、朝
起きたら、会社に行くのが、嫌で嫌で、
たまらなかつたよ。まあ、夜は夜で、K
田、当時は課長に鍛えられ、朝から晩ま
で、大変やったよ。ハッハッハ。明石
君は大丈夫そうやね？」

「いえいえ、私も入社7年目で、M居
さんの厳しいご指導に耐える位の術は、

堺工場で鍛えられ、なんとか、学んで来
ましたので、鬱にはならないと思います」
と答えた。

「おう、そうか。それはそうだ。ねえ、
K田さん、N川とかH川さんの部下のT
君なんかは、堺工場に転勤させて、もの
作りの現場で、原価管理か、工程管理な
どを学ばせ、鍛え直した方が彼らに取っ
ても良いと思いますよ。我々、輸出部員
はメーカーの社員であり、商社マンでは
ないです。アメリカの会社に居たら、M
商事からも何人が派遣されて来ていま
すが、我々とは自社ブランドに対する思い
入れが全然違います。M商事のような商
社マンにとっては、売れば何処のブラ
ンドでも良いのであって、数字さえ上
れば良い、という考え方が身につけてし
まっていますね。同じように輸出部の生
え抜き社員は、私も含めてですが、メー
カーの社員であることを忘れがちになり
ます。現場感覚がなくなるんですね。私
は、それを常に自戒しています」と話
題になっていたT君のことも含め、自説
を述べ、コップに残っていたビールを旨
そうに飲み干した。

明石は空になったT田のコップにビー
ルを注ごうとしたら、「自分で注ぐので、
気を使わずにどんどんやってね」と言っ
て、自分でビールをコップに注ぎ、一気
に飲み干した。明石も自分でビールをコ
ップに入れて、飲んだ。

T田は「アメリカに居ると日本の事を

よく知ろうとするのと同じように、自分の会社、工場、製品の事をよく知ろうという想いに駆られますね。自分のアイデンティティを求めるようになるんですかね」とK田とH川の方を向きながら言った。

K田は「そうだなあ。そう言えば、俺も昔、ブラジルに居た頃は、そういう想いになったなあ」とT田に共感した。

T田は「K田さん、これから、どんな5年目位の各部門の若手社員を海外の販社に送り込んで、商社に頼らず、自社でマーケティング、貿易機能、販売、サービス網の拡大、現地資金調達までやらないと、世界企業にはなれませんよ」と熱く語った。

明石はT田の「世界企業」という言い方に、会社を考えるスケールの大きさに感心すると同時に、A級サラリーマンとの格差を感じさせられた。

オクラの山たより (35)

因了生

一

小野一族で伝説的な存在といえるのは深草少将との悲話が伝えられ謡曲「卒塔婆小町」でも取り扱われた小野小町、何度も柳に飛びつく蛙を見て粘り強い努力

の大切さを悟り後に当代最高の書家と讃えられた小野道風、そして、冥府との往還をしたという小野篁です。小町と道風は後日また触れるつもりですが、今回は小野篁です。

小野篁がさきほど述べた冥府の閻魔大王のもとで裁判の補佐をしていたという伝説はすでに十二世紀には成立していたようで、「今昔物語」巻二十の四十五に「小野篁、情により西三条大臣を助くる語」という話で記されています。話の内容は病死して閻魔庁に引き据えられた左大臣藤原良相が篁のとりなしで生き返ったというもの。藤原良相は右大臣で太政大臣藤原良房の弟であり左大臣源信とともに実質的に政治の頂点に立っている人物でした。ここで篁が救ったことになっている人物が藤原良房でも源信でもなく良相であるのはなぜか、ということが気になるのですが、この良相は小野篁という人を知る上で大きなカギを握る人物です。詳しくは後ほど述べますが、取りあえず次の点だけを知っておいてください。

藤原良相家の人々は歌物語の「伊勢物語」にもしばしば現われます。「伊勢物語」の主人公といえは在原業平。この業平と藤原良相は親しく付き合っていたようです。また、最近NHK西日本の二条駅の西で藤原良相の邸宅であった西三条邸が発掘され、平仮名で書かれた和歌の一部が記された九世紀前半の墨書土器が発掘されました。仮名が記された遺物としては

日本最古といわれています。こうしたことから見ると藤原良相の邸宅では業平を代表として多くの文人が交流していたことが想像されます。

それはさておき、この篁が冥府と行き来したという話が民衆に広く伝わったためでしょうか、篁が冥府との往来に使ったという井戸が京都東山にある六道珍皇寺の境内にあります。また、愛欲にまつわる話を描いた罪で地獄に落ちた紫式部を篁が救ったという伝説から京都市北区にある島津製作所の敷地内に紫式部と小野篁の墓が並んでつくられています。

また、小野篁の伝説で冥府を往還したという話と並んで有名なのは嵯峨天皇とのやりとりの話です。これは鎌倉時代初めにつくられた宇治拾遺物語にある「小野篁の広才の事」という話です。

内裏に札を立て「無悪善」と書いてあるのを見た嵯峨天皇が小野篁に読めと言われたのですが、篁は「恐れ多いので申し上げることはできません」とこたえるのですが、天皇が「すぐにこたえよ」としつつこく言われるので篁はしかたなく「さ(嵯峨)なくてよからん、と読みます」とこたえます。

天皇は怒って「お前じゃなくていったい誰が書くというのか」と言われてさらに難題を篁にふっかけます。「文字で書いたものは何でも読めるのか」と天皇から言われた篁は「何でも読んでごらんにいれます」とこたえると、これではどうだ、

と嵯峨天皇が出してきたのは「子(ね)」の文字を十二個書き連ねたもの。これを篁は苦もなく「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし」と読みました。天皇はにっこりとされて何事もなく終わったという話。

もちろん天皇は本気で怒ったわけではなく小野篁をからかっただけで、話の全体は天皇と篁の親密な関係のべた内容ですが、たぶん「鬼のように賢い人だ」(少し前、高校生たちは試験後に「鬼のように難しい」という意味で「鬼むず」という言葉をよく使っていました。もちろん無茶苦茶難しいという意味です)という伝承からヒントを得て作られた話であろうか。ひよっとしたら人間離れた「鬼のように賢い人」というイメージから冥府との往還をしたという話ができたかもしれませぬ。

二

それでは実像に近い小野篁の姿はどうであったかとなると最も詳しいのは正史「日本書紀」にある彼の墓伝(こうでん 三位以上の貴族が死去すると墓去といひ、その人の伝記を墓伝といひ)にあたるのがよいでしょう。この記述にそって彼の人生を見ていきましょう。

小野篁は八〇二(延暦二十一年)年、岑守の長子として生まれました。その少年

時代のことに ついて彼の墓伝は次のような興味深い逸話を伝えていきます。

篁は参議正四位下岑守の長子である。

岑守は弘仁のはじめに陸奥守となった。篁は父と共に陸奥国にいき、彼の地で乗馬に明け暮れた。後に京師に帰って来ても学業にむかうことはまったくなかった。嵯峨天皇はこれを聞いて嘆いていうには、お前は優れた官人にして文人の岑守の子として学びの道に入るにはもはや十分に成長しているではないか。どうして父とは真逆の弓馬を扱うつわものになるうとするのか。篁はこれを聞いて深く恥じ悔やみ、それを聞いて篁は初めて学問の道を志した。

篁の少年時代のことが分かる記述はこれだけですが、ここからわざわざですが自由で東北の原野を思う存分駆けめぐった少年時代を過ごしたと、そして、嵯峨天皇から破格ともいえるほどの期待を寄せられていたことです。その期待のあらわれともいえる言葉が原文では次のように書かれています。

「既為其人の子（既にして其の人の子たり）」

この言葉を聞いたとき篁は十八歳。「お前はあの岑守の子ではないか。いったい何をしているのだ」という叱責を受けて彼はおそらく猛烈な勉強をしたに違いありません。早くもわずか二年後の八二二（弘仁十三年、二十一歳の篁は文章生試（も

んじようせいし）に及第しています。

ここで一言、平安時代の試験についていえば、律令制の下では原則として五位以上の貴族の子弟は大学寮に入るようになっていきます。入寮後は徹底した試験制度が待っていました。大学寮の学生に対してまず課せられたのは寮試。これに合格すると擬文章生となります。ついで式部省が出す省試が課せられ、これに合格すると文章生となります。文章生のうちで成績優秀者二名が文章得業生（もんじようたくごうしやう）になり、最後の難関である対策（方略試、秀才試ともいった）があり、この結果により官職に就けるということとなります。

ただし、よく知られているように上級貴族の子弟には蔭位の制があり、試験を受けなくても親の七光りでドンドン昇進ができました。このため平安時代の中頃、つまり紫式部の時代には大学寮は下級貴族が官職を得るための教育機関となっており、卒業しても高位高官を望むことはできませんでした。「源氏物語」で飛び切りの上級貴族である光源氏は将来の出世が約束されているとはいえ学問・教養は大事とあえて息子を大学寮に入れますが、それは紫式部の同時代の風潮に対する批判であったかもしれません。

この大学寮の制度の中で飛び切りの優等生は菅原道真でしたが、小野篁も彼に劣らず優秀でした。

篁の文章生試で彼が答案として提出し

て漢詩が勅撰漢詩集「経国集」に残されています。漢詩の問題は「隴頭秋月明（隴

頭の秋、月明かなり）」という詩句から一行五字で十二行つまり六十字で韻を踏みながら「賦」を作るというもの。問題の意図は第一に初唐の詩人楊師道の楽府「隴頭水」を踏まえているかどうか、問題となった詩の内容をよく理解して詩としてひらめきが感じられるものが加えられた作品になっているかどうか、でした。

「経国集」は小野篁とおそらく同時に受験した他の三人の作品が収められています。彼らの作品を一読して気づくことは「月」に関する過去の詩作品で使われた語を少しばかり羅列的に書き連ね、あるいは技巧を駆使して秋月の光を表現することに重点があることです。そのため

異民族と戦う西域の最前線であった隴頭の景色は添え物に過ぎなくなつて、楊師道の作品との関わりが薄いものとなつていきます。一言でいえば詩の作品としてはあまりおもしろくありません。

それに対して篁の作品は西域らしい雰囲気や漂わせつつ皓皓空漠たる秋月を表現し、しかも寒気の厳しいさまを言い表しています。長い詩なので、ここでは詩の前半だけ紹介します。

反覆単于性 反覆す 単于の性

辺城未解兵 辺城 はまだ兵を解かず

戍夫朝摩食 戍夫は 朝に 摩食し

戎馬曉寒鳴 戎馬は 曉に 寒鳴す

帶水城門冷 水を帯びて城門冷ややかに

隴頭一孤月 隴頭に 一孤月あり

（異民族の王は反抗をくり返す性格だ。そのため西域の城郭はいまだに兵を引くことにはできない。最前線の兵士は朝の食事はムシロの上でとり、軍馬は明け方になると寒さでいなく、堀を前にして城門は冷ややかにそびえ、隴頭には寒々とした月が一つポツンと輝いている。）

西域の緊張感あふれる世界がグッと引き締まったイメージで詩によって表現されていると感じられませんか。篁の優れた詩才はすでに紛うかたなくこの詩にあらわれているといえます。

すぐれた漢詩人であり、良吏でもあった父岑守。その岑守の子として恵まれた条件・環境のもとで、その始発期の詩人形成がなされたことをここでは確認しておけばよいでしょう。

三

文章生試に及第した十年後、小野篁は従五位下となり太宰少弐に叙任されています。その後は順調に彼は官位を上りつめていくわけですが、この間に父岑守の死がありました。その悲嘆ぶりは常識をはるかにこえるものであったと正史は伝えていきます。

ここで少し回り道ですが、当時の文人たちを覆っていた空気がともいうべきものについて触れておきましょう。

「吏隠兼得」、つまり官吏と隠者を兼ね

備えた気分が文人にとつての理想であつたといふことはすでに述べました。これに加えてもう一つ、この時代の文人の持つていたものは「楽天性」でした。

嵯峨天皇の時代には白居易の漢詩は本格的にまだ入ってきていません。「文選」の世界こそが彼らの考える漢詩の理想郷でした。この時代の作品をいくつか読んで気づくことは「楚辞」が描く「去り行く秋への哀惜の切ない思い」への愛好が強いことです。たとえば「楚辞」の「九弁」をベースにした播岳の「秋興賦」の光薄らいで廓寥かつ澄明な秋の雰囲気や光が力を失つて何となく寂しい寂寥と憂愁とが、ことのほか好まれたようです。ここでは播岳の「秋興賦」(文選 卷十三 物色の賦の部)の初めの部分を紹介してみます。この詩に書かれた感覚は現代の我々でもしつくりと来るものではないでしょう。書き下し文と口語訳を示します。

「四運たちまちにして其れ代序す。万物は紛としてもつて廻薄す。花蒔の時育をみて、盛衰の託するところを察す。冬つきて春敷くに感じ、夏茂りて秋落つるを嘆く。末事の榮悴といえども、これ人情の美悪なり。善いかな、宋玉の言にいわく、「悲しいかな、秋の気たるや、蕭瑟として草木揺落して変衰し、慄慄として遠行に在り、山に登り水に臨みてまさ

と。

(四季はあわただしく移り変わり、万物は入り乱れて転回する。植えた花のおりおりの生育を見れば、盛衰のことわりは察知される。冬枯れの姿が春には生命を敷きのべるさまに胸うたれ、勢い盛んな夏から秋の凋落に向かうとき心は痛む。この微少な草木の榮枯にさえ、人の心は楽しみ愁うのだ。いみじくも「楚辞」で宋玉は言っている。「悲しいものだ。秋の気配は。サワサワと草木が葉を落として衰

えはてると、うらぶれた心はさながら異郷にさすらつて、山に登り、水を眺めつつ、ふるさとに帰る人を見送る境地だ」と。)もともと宋玉の「九弁」は世に入れられず放逐された師の屈原に対する哀惜の情を託して作られたものだと言われてきました。とすれば、世の無理解に対する作者の悲憤が、そして社会的な正義の喪失に対する抗議が、秋への悲傷の思いの下に通底低音のように響いています。

「秋興賦」の作者の播岳はこの作品を書いた後、政界のあまりの腐敗ぶりに十年ほど隠遁の生活に入りますが、後に復帰します。しかし、十数年の後に謀反の疑いで処刑され一族の者たちも誅殺されました。播岳に限らず六朝の詩人たちは、その多くがつまらぬ政争に巻き込まれ街の市場で謀反の罪で首をはねられました。「悲しいかな、秋の気たる」という秋への悲傷の言葉語る詩人の背後には政治的にかんりの緊張を強いられる状況があつたのです。

しかし、嵯峨天皇の周辺にいた詩人たちには、こうした悲愴ともいつてよい思いはなく秋への悲傷の思いがただ単に情緒的なものとして受け取られていて、むしろ楽天的ともいえる雰囲気が漂っていました。

考えてみれば京の地に住むことを強制されていた平安時代の貴族が「もうこんなことはやっていられない」と京を離れて、田舎にある自分の領地で静かな隠遁生活を送るのは不可能なことでした。だから、吏隠兼得といつてもどつちつかずの中途半端なものとなるしかなく、悲秋の思いと自らの境遇を重ね合わせることは悲劇的な自分の助教を心底から嘆くこととはなく極めて情緒的な気分的なものでしかなかったといえます。その点、自分の不安定な政情の中で明日はどうなるかわからない追いつめられた思いで秋の悲傷の思いを綴つた六朝の詩人たちとは大きく異なります。

嵯峨天皇の時代の詩人たちが「楚辞」や「文選」の悲秋の詩を愛好しながらも楽天的であるという理由です。ひとつ例をあげます。五言律詩「暇日閑居」です。作者は良岑安世(七八五〜八三〇)。桓武天皇の子にして嵯峨天皇の異母兄であり、良岑朝臣を賜つて勅撰漢詩集「経国集」の撰者の一人となつた人物です。すぐれた漢詩人であると同時に重要な施策を次々と立案推進する優秀な官僚でもありました。

暇日除煩想 暇日 煩想を除き
春風読楚詞 春風に楚詞を読む
簷閑啼鳥換 簷のき 閑かにして啼鳥換

(かわり)

門掩世人稀 門を掩として世人稀れなり
初筍篁辺出 初筍(しよじゅん)は篁辺(こう

へん)に出で

遊糸柳外飛 遊糸 柳外に飛ぶ

寥寥高枕臥 寥寥 枕を高くして臥す

庭樹落花時 庭樹 落花の時

(休日)の今日、いつものわずらわしい思いを

離れ、春風の吹く部屋の中で「楚辞」を読む。静かな軒端には入れ替わり立ち替わり鳥が鳴くばかり。閉ざした我が家の門を訪れる世間の人はめつたにない。初物のタケ

ノコは竹藪のあたりでをもたげ、陽炎は柳のまわりでユラユラと立ち上っている。ひっそりとして枕を高くして安らかに横たわる、そうした至福の時に庭の木の花が一つ

また一つまた一つと落ちていく。)詩の出来映えは上々といつてよいでしょうが、この何の翳りもないのどかな閑暇に「楚辞」が読まれていることに注目してください。先ほど述べたように、本来、

「楚辞」は社会的な正義が喪失されていることの抗議の思いがこめられた作品でした。しかし、良岑安世の詩にはそういった思いは少しも感じられません。「楚辞」や六朝の詩人たちの詩に漂う気分だけを吸収しているに過ぎず、官吏生活の中で閑暇を得た折りに庭園の風光に心を解き放つことによつて隠者の気分を味わ

っているものであつて、官人生活と精神の自由の対立、政治腐敗や社会的不正義への憤りなどが突き詰められて思考されているわけではありません。

蛇足ですが、ここまで書いてくるとかつて教科書裁判で戦われた家永三郎氏の次の言葉を思い出します。

「日本の思惟は無礙の親和力は常に対立する二者を融和と解せしめる力がある。そのため）深い苦悩をも情趣のうちには理解し去る場合が多く、それによつて深刻なる思想がしばしば浅薄化される傾向を免れない」

（日本思想史に於ける否定の論理の発達）から）

この言葉は遙かなる昔、九世紀の詩人たちにのみあてはまるだけではなく現代の我々にも耳の痛い言葉でありましょう。

四

さて、話を小野篁にもどしますと、当然のことながら彼も当時の空気の中に生きていた以上、「楚辞」を愛好する精神と秋の悲傷感を感覚的に受容する楽天性を備えていたのはいうまでもありません。

二十五歳の篁が作った作品を紹介します。詩の題は「秋雲篇、同舎の郎に示す」で、秋雲の詩篇を作つて、同じ役所の官人に示したものです。長い詩なので最初と最後だけを示します。

気憐慄

気は憐慄（りょうりつ）たり

具品秋 具品の秋

客在西 客は西に在り

歳欲適 歳は適（つ）きんとす

登山臨水耶楚望 山に登り水に臨み、耶楚を望む

移目寒雲遠近愁 目を移せば、寒雲遠近に愁う

…… 中略 ……

朝為巫嶺神姬氣 朝には巫嶺神姫が氣（いき）となり

夜作銀河織女衣 夜には銀河織女が衣となる

富貴人間如不義 富貴は人間にして不義の如し

華封勸我帝鄉意 華封 我に勸む 帝郷の意を

（悲しく痛ましい秋の気よ、物すべてがそなわる秋よ。旅人は西の方に旅立つたまま、今年も暮れようとしている。山に登り、水辺を眺めつつ故郷の楚の国を遠く眺めや

り、目を移せば寒々とした秋の雲が空遠くまた近くに憂わしげに重くかかる。……中略……朝の雲は巫山の神女のかもし出す

気となり、暮れの雲は天の川の織女星の衣となる。この世で富貴になることは義にそむき天空の雲のようにはかないもの。だから、華という地の役人は白雲に乗つて理想郷に住まう天帝のもとに行つたわけを私に話し共に行くことを私に勧めてくれたのだ。……私も雲に乗りたいたい……）

「憐慄」、「登山臨水耶楚望」という詩句からは、この篁の詩が潘岳や「楚辞」九

弁の影響が強く出ていることが分かります。詩の主題は「雲」ですが、「楚辞」にある社会全体に不正義が横行し汚れきつたこの世を捨てて天帝のもとに行くことを強く願う悲愴な思いは、この詩には感じられません。どこかのボンボンが「天帝が住まう素敵な世界に行きたいな」と思う気楽な気分が感じられるだけです。またわずらわしい浮き世を捨てて隠逸の世界にあこがれる思いも垣間見えます。

ここから見る限り、小野篁は嵯峨天皇の時代の空気を十分に吸い込みつつ育つたのであり、嵯峨天皇の寵愛を十分に受けて活動した詩人であつたといつてよいでしょう。直情径行なふるまいや感情の激しさがとやかくいわれることの多かつた篁でしたが、案外、嵯峨天皇への甘えがあつたかもしれません。

若い日の彼の姿を彷彿とさせる文章が「本朝文粹」（平安後期に藤原明衡が編纂した漢文のアンソロジー）にあります。平安時代の結婚の申込みは、まず男性から女性のもとに和歌を送り、その後、男女の間で和歌のやりとりが何回かされて、やがてゴールインするのが普通です。

ところが小野篁はいきなり相手の女性の父親に手紙（もちろん漢文で書いた）を出して「あなたの家の娘と結婚したい」ということを申し出ます。このイレギュラーな文章が残つたのも不思議ですが、この出来事は中世にまで一つの説話として言い伝えられました。少しく長い文章

なので一部だけ紹介します。文章の題名は「右大臣に奉る」で右大臣とは藤原三守（ふじわらみもり）。篁は彼の十二番目の娘を妻に欲しいと書状を送つたので

……前略……

伝え承るに賢き十二娘、四徳並びなく、六行（りつこう）欠けず、いはゆる君子の好速（こうきゆう）、良人の高媛といふものなり。篁、才は馬卿にあらざれば琴を弾ずること

いまだよくせず。身は鳳史にあらざれば簫を吹くこと、なほつたなし。

……中略……幸いに願はくは府君をこうむりて、同穴偕老の義を共にせんことを。

……以下、略……

「四徳」とは「礼記」にある婦人の四つの徳のこと。婦徳（貞順なこと）、婦言（言葉つかい）、婦容（身だしなみ）、婦功（家事）の四つ。また、「六行」とは「孝・友・睦・姻（外戚に親しむこと）・任（人のために力を尽くす）・恤（いつくしむこと）」の六つ。

「好速」とは良いつれ合い、「高媛」は「すばらしい女性」のこと。

「馬卿」とは漢の著名な文学者である司馬相如のこと。相如は琴の名手で琴の縁によつて妻の卓文君と結ばれました。

また、鳳史は戦国時代の秦の人で簫の名手。ひとたび簫を吹けば鳳凰も舞い降り

て聞き入ったとか。秦王の王女と結ばれたという伝説があります。「馬卿……なほつたなし」のくだりは自分には優れた女性を引きつける才芸のないことを訴えた部分であるのはいうまでもありません。

「同穴偕老」とは、よく「偕老同穴」といわれますが、末長く夫婦が仲むつまじく連れ添うことです。

いかがでしょうか。今の時代でもこうした手紙を恋する女性の父親に向けて直接に送る人はほとんどいないのではないのでしょうか。

要するに「あなたの娘が欲しい」という手紙なのですが、よほど話題性のある内容だったのでしよう。篁の死後、四百年後に成立した説話集「十訓抄」第十才能・芸業こいねがふべき事」にもこの手紙の話が取り上げられています。

その話の最初に

「小野篁、三守の大臣に、其の娘を望みける文をもて、手づから渡しけるとかや。」とあって、自ら右大臣の邸宅におもむき自分の手で渡したと書かれています。

いささか過激な行動ぶりへとバージョン・アップされていますが、そのような人と伝えられてきたのでしょうか。なお、「十訓抄」によれば三守は「馬卿……なほつたなし」の言葉を見てひどく感動して篁を婿にすることにしようということになっていきます。この手紙の書き手には無礼ながらもすぐれた字才のあることを三守が認めたのでしよう。

隠された歴史(10)

満田正賢

今回は、持統天皇の吉野行幸に関する私の新しい仮説をご紹介します。持統天皇は在位十一年の期間中に実に三十一回も吉野に行幸しています。持統天皇の吉野行幸の目的は亡き夫天武天皇との思い出の地を訪れることによって、天武天皇の権威を意識させ、その権威を借りる意図があったのではないかとされています。しかし古田武彦氏が、吉野行幸の回数が異常に多いこと、冬期を含め季節を問わず行幸が行われていることなど多くの不可思議な点に疑問を投げかけました。古田史学の会のメンバーの中には、吉野への往復に費やした日数が異常に短く、物理的にも吉野へ往復するのは不可能であるという実地検証をした人もいます。

古田氏はこの数々の疑問点を解決する仮説として「日本書紀にある持統の吉野行幸記事は白村江以前の九州王朝の史書からの盗用であり、三十四年遡上した九州王朝の天子の佐賀なる吉野への行幸記事である」という仮説を提起しました。しかし私は、古田氏の仮説に対して、日本書紀がなぜわざわざ三十四年前の記事を持統紀に挿入しなければならなかったのかと疑問を感じていました。又持統

は十一年間の在位期間中に、吉野訪問三十一回以外にも伊勢、紀伊など十二回の行幸をしており、吉野訪問だけを問題にするのではなく計四十三回の行幸、すなわち持統の頻繁な行幸という名の外出自体の理由を調べなければならぬのではないかと問題意識を持つていました。持統の行幸は吉野以外にも十二回あります。造宮中の藤原宮視察三回、伊勢一回、紀伊一回、高安城一回、泊瀬一回、葛城高宮一回、飛鳥皇女の田莊一回、多武峰一回、菟田吉隠(うだのよなばり)一回、二槻宮一回です。

このうち持統六年三月の伊勢行幸については、農繁期を妨げるという中納言直大式三輪朝臣高市麻呂の諫めを振り切つて行幸しています。この一連の行幸の間には吉野行幸が三十一回あるわけです。

持統の吉野行幸の目的は一般的に天武天皇を偲ぶ為ということになっていますが、私は、公式的な理由としてはそうであったと考えています。逆に言えば、「亡き天武天皇を偲ぶ」という理由が吉野行幸の免罪符になっていたのではないかと考えています。吉野以外に行幸するときにはその理由を臣下に説明しなければならず、伊勢行幸の時のように臣下に諫められる可能性もあります。しかし、吉野に行くと言えば臣下は誰も反対できなかったのではないのでしょうか。四十三回の行幸中三十一回の吉野訪問は明らかに多いです。持統は亡き天武天

皇を偲ぶためという公式的な理由と別に真の目的を持つていたということも考えられますが、行幸(外出)それ自体が目的となつていたとも考えられるのではないのでしょうか。

持統の吉野行幸記事は実に簡潔に記されており、理由も行幸中の出来事も記されていません。そして吉野行幸の記述は以下の三パターンに分かれています。

A: ○月○日天皇が吉野の宮に行幸した。(帰りの記事はなし) 七回

B: ○月○日天皇が吉野の宮に行幸した。○月○日天皇が吉野の宮から戻った。十八回

C: ○月○日天皇が吉野の宮に行幸した。○月○日車駕が宮に戻った。六回

ちなみに吉野以外の行幸でAと同じパターンなのは、高安城、泊瀬、飛鳥皇女の田莊、藤原宮、二槻宮です。高安城は別にして、その他の場所と飛鳥浄御原宮との距離から推定すると、このAのパターンは日帰りコースであると考えられます。実際に日帰りしたと記載しているケースもあります。

例:「八年春正月乙酉朔丙戌……

乙巳、幸藤原宮、即日還宮」

高安城と吉野については通常の車駕の隊列を想定すると同様の日帰りコースとするには無理がありますが、持統が少数の供を従えて馬に乗って出かけたという想定であれば可能なのではないのでしょうか。又、持統は乗馬ではなく正式に車

駕の隊列を組んで行幸したケースもあるでしょう。その時の記載方法がCのパターンだったのではないのでしょうか。

持統が飛鳥から吉野に行く行程は記録には残っていませんが、一般的には飛鳥川に沿って稲渚・栢森（かやもり）を経て、芋峠を越えて吉野へ入る、総行程一八kmの最短コースを輿に乗って往復したと考えられています。しかし、この芋峠は標高五五五mであり、冬期には凍結します。古田史学の会のメンバーが現地調査をして、二日間かけてもこの道で吉野と飛鳥の間で往復するのは不可能だ、ましてや冬期にこの峠を越えるのも不可能だと断じたのはこのルートです。

私は持統の吉野行幸の場合、高取町から標高三一五mの壺坂寺のある土佐街道の峠を越えて吉野に入ったものと考えています。飛鳥から吉野宮までは二十〜二十五kmの遠回りの道になりませんが、土佐街道（登り道）に入ってから峠までは二km強で、馬で越えるにもこの程度の距離であれば問題はありません。峠近くにある壺坂寺は大正三年（七〇三年）に創建されています。持統が亡くなったのは大正三年一月のことであり、本堂である八角堂は持統の供養のために建てられたと伝わっています。又峠を越えてしばらく下った地域には高取町馬佐（ばさ）という地名が残っています。吉野川に突き当たってから吉野宮があったとされる宮瀧まで五〜八km程度の川沿いの道は乗馬に

は適任の道ではなかったかと感じさせる道です。

ここで、古田武彦氏の吉野行幸記事三十四年遡上説について触れます。

古田氏は著作「壬申大乱」の中で、万葉集にある柿本人麻呂の歌の吉野がその内容から大和の吉野ではなく九州佐賀の吉野であると考察しています。万葉集に収められている柿本人麻呂の歌を始めとした古歌には、説明書きと合わない内容が歌われているものが多くあります。一方で白村江の戦いの前には斉明天皇も中大兄皇子も大海人皇子も皆九州に移動しているにも拘わらず、九州の人々の歌も白村江の敗戦の悲劇を歌った歌も一切ありません。古田氏は万葉集に収められた一つ一つの歌の内容を吟味し、多くの歌は九州で作られた歌ではないか、それにあたかも大和で作られた歌であるかのような説明文を加えたのではないかと考察しました。この考察は非常に優れた考察であると私は考えています。しかし、持統の吉野訪問を「白村江直前の九州王朝の天子の佐賀なる吉野への行幸記事を三十四年遡上したものである」としたのは飛躍のし過ぎではないかと思えます。白村江前の記事は素直に斉明期の記事の中に折り込めば何ら問題がないと思われるからです。

又古田氏は、持統八年夏四月の干支（丁亥又は丁未）がその月には存在しない干支であることに着目し、吉野行幸記事三

十四年遡上説の一つの根拠としました。たしかに、持統八年夏四月に「丁亥」または「丁未」がないのは事実ですが、日本書紀の原文には持統八年夏四月の朔

（一日）の干支（甲寅）と吉野に行った日の干支（庚申）が正しく記載してあります。

原文：「夏四月甲寅朔戊午、以淨大肆贈

筑紫大宰率河内王、并賜賻物。庚

申、幸吉野宮。丙寅、遣使者祀廣

瀬大忌神與龍田風神。丁亥、天皇

至自吉野宮。」

吉野から戻った日の干支のみが間違っている理由は、干支の誤記、又は戻りは翌月（五月）のことであり月の記載漏れ、のどちらかでしょう。三十四年前の記事を持統紀に挿入した際に干支の書き換えを漏らしたという可能性もなくはありませんが、この干支問題を三十四年遡及説の根拠とすることは出来ないと考えます。話は変わって、私が今回考えた、持統が乗馬好きであったという仮説についてお話しします。

持統五年三月五日に天皇が公私の馬を御苑で観閲したという記事があります。

これは公式行事ではなさそうです。持統の馬好きをうかがわせる記事です。ちなみに天皇による馬の観閲記事としては、天武八年八月に天武が良馬の駿足を鑑賞するために実際に馬の走り比べを行ったとする記事があります。天武も乗馬好き

であったからこそ持統の乗馬好きを認めていたのではないのでしょうか。

更に、天武十一年夏四月二十三日に『今から以後、男女ごとごとく髪を結え。大晦日以前に結いおえよ。ただ髪を結う日は、また（別）勅の（趣）旨を待て』という詔が出され、婦女が男のように（鞍にまたがる中国風で）馬に乗るのは、この日に始まった。」という記事があります。続いて天武十三年閏四月五日には「女の年四十以上は、髪を結いあげようが結いあげまいが、また馬に横に乗るうが縦に乗るうが、どちらも任意である。」という変わった詔が出ています。この詔は天武が何のために出したものでしょうか。持統の年齢を確認したところ、持統の生年は大化元年（六四五年）、天武十三年は六八四年であるから持統の年齢は数えの四〇才でした。これが偶然だとは思えません。天武は皇后持統の要望を受けて持統が髪を結いあげて馬に縦乗りする姿を天下に認めさせ、更に持統が四〇才になった時点では、疲れた時に横乗りする（従者に馬を引かせる）のも髪を下ろして乗るのも自由だ。と宣言したのではないのでしょうか。

唐代の中国では、北方騎馬民族の風俗を反映して女性の男装や乗馬が流行していました。女が乗馬をするという中国の風俗は、白村江の戦いの後、一種の占領軍として日本に来ていた唐の

將軍郭務儂などを通じて天智期に伝わっていたものと思われます。天智の娘であった持統が乗馬に親しみを持ったことは必然とも言えそうです。

そのそも、鷗野讚良(うののさらら)という持統の名前の由来については、持統が讚良郡鵜野村に住む宇努連の乳母に養育されたためと伝わっています。古墳時代の讚良は馬を飼う初期牧場であったとみられており、讚良郡にある部屋北(しとみやきた)遺跡からは古墳時代の大量の馬の骨が出土しています。そして、讚良郡の名を冠する娑羅羅馬飼造と鵜野村の名を冠する菟野馬飼造の両名が天武十二年十月に同時に連の姓を授かっています。天武が持統の為に女が髪を結いあげて馬に縦乗りすることを天下に許した翌年です。持統と讚良郡鵜野村(現四條畷市)にいた馬飼集団との関連が推測できるのではないのでしょうか。

古田氏が「日本書紀にある持統の吉野行幸記事は白村江以前の九州王朝の史書からの盗用であり、三十四年遡上した九州王朝の天子の佐賀なる吉野への行幸記事である」という考察をおこなう原因となった持統の吉野行幸に関する数々の疑問は、持統が乗馬による遠出を趣味にしていたという単純な理由で説明出来ません。持統が日帰りで吉野を往復したことは乗馬の感覚であれば可能でしょう。季節に關係なく冬期にも吉野に出かけたということも、芋峠ではなく壺坂寺のある土佐

街道の峠越えを選択すれば、多少の積雪量であれば可能でしょうし、乗馬日和を選んで外出したと考えればなお問題は無いと思えます。在位中四十三回の行幸のうち三十一回も吉野に行ったことは「亡き天武天皇を偲ぶ」という公式的な理由に誰も逆らえなかったと考えれば納得がいきます。持統が退位後に一回しか吉野を訪問していない理由は、持統はすでに五〇才を超え体力が衰えていたからではないかと思われます。ちなみに、持統は十一年間の在位中に吉野その他への日帰り行幸を十四回行っていますが、そのうちの八回は行幸が始まった持統三年・四年に集中しています。在位期間の後半になるほどゆとりを持った行幸に変えていったことが読み取れます。

古田氏の考察した持統吉野行幸記事三十四年遡上説は、持統の異常な吉野訪問に対して納得しうる理由が見つからなかったために考え出された仮説ですが、持統の乗馬好きという単純な理由との比較で再検討すべきものと思います。

道をゆく (4)

山の辺の道(四)

成瀬和之

檜原神社からの道は纏向川を東に大きく迂回し、西へ戻ると穴師の集落に出ます。

柿やミカンが植えられた高台からは奈良盆地が広く見渡せ、「山の辺の道」らしい、いにしえからの原風景が広がります。金剛山、二上山、信貴山から生駒山の稜線が、それぞれの山の特徴を表して美しく遠望できます。

ここからの道沿いには、柳本古墳群に属する奈良盆地を代表する大型古墳が、渋谷山古墳(景行天皇陵)、行燈山古墳(崇神天皇陵)、黒塚古墳と続きます。

景行天皇陵と呼ばれている渋谷山古墳は、全長約三百メートルで、濠に囲まれた壮大なものです。四世紀の古墳としては、その堂々たる造りが抜きん出ています。景行天皇は、さまざまな武勇伝を持つ日本武尊の父と伝えられますが、在位六十年のうちに八十人の皇子・皇女をもうけ、「日本書紀」によれば百六歳、「古事記」によれば一三七歳で死んだことになりました。ありえない話ですが、初代神武天皇から第九代開化天皇までの、実在したとは到底考えられない「天皇」と比べれば、日本武尊の伝承などは大和政権の国土統一の事実を何らかの形で反映したものである可能性は否定できません。

景行天皇の祖父に当たるのが「第十代天皇」とされる崇神天皇です。崇神天皇を大和王権の創始者とする説もあります。行燈山古墳(崇神天皇陵)は全長約二四〇メートルの堂々とした前方後円墳です。古墳時代前期に築かれたと考えられ、丘の上の先端を利用し、大和平野を一望できる美しい場所にありまます。周囲にぐるっと濠をめぐらせた大王の墓らしい壮大な造りで、この濠は江戸時代末期に灌漑用水としても利用されました。崇神天皇は「日本書紀」によれば在位六八年に百二〇歳で、「古事記」によれば一六八歳で死んだこととなります。どう思われますか？

黒塚古墳は古墳時代中期に築造されたと推定され、全長一三〇メートルの前方後円墳です。中世から近世にかけては柳本城の一部に利用されたこともありまます。卑弥呼にゆかりがあるという説もある三角縁神獣鏡三三面などが一九九八年に出土し、話題になりました。古墳を堪能し、古代の世界に思いをはせているうちに、疲れてきたのでJR柳本駅に向かいました。

成瀬和之

封人の家

(はじめに)

「我がおくのほそ道の旅」は「山寺」から始まり「平泉」で終わりましたが、芭蕉の旅は「平泉」から「山寺」へ向かう途中に「封人の家」や「山刀伐峠」を通っています。そして、これらの章は『おくのほそ道』の前半から後半への転換にあたって重要な役割を果たすと考えられます。

そこで、まだ私が行ったことがなかった「封人の家」と「山刀伐峠」へ行ってみることにしました。

やはり、『おくのほそ道』のストーリーを考える上で重要な場所であったので、補足をするにしました。

「封人の家」

(現代語訳)

南部地方へ向かって北上する街道を、はるか遠くに眺めやりながら、道を南西に転じて、岩手の里（宮城県大崎市の岩出山）に泊まった。そこから、小黒崎・美豆の小島を通り過ぎて、鳴子温泉に出た。

鳴子温泉からは、尿前の関を通り抜け、出羽の国（山形・秋田県）へ山を越えて出ようとした。

この山越えの道は、旅人がほとんど通らないため、関所の番人に不審尋問を受け、ようやく解放された。

大きな山を登って行くうちに、日が落ちてしまったので、国境を守る村長の家を見つけて、一夜の宿を頼んだ。ところが、風雨荒れ続けて、とんでもない山中に、三日間も閉じ込められるはめになった。

蚤虱馬の尿する枕もと

(この宿は母屋に馬を飼っているので、蚤・虱にせめられるうえ、枕元に馬の小便をする音が聞こえてくる)

(原文)

南部道遙かに見やりて、岩手の里に泊まる。小黒崎・みづの小島を過ぎて、鳴子の湯より尿前の関にかかりて、出羽の国に超えんとす。この道旅人まれなる所なれば、関守に怪しめられて、やうやうとして関を越す。大山を登つて日すでに暮れければ、封人の家を見かけて宿りを求む。三日風雨荒れて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

(「おくのほそ道」(全角川ソフィア文庫)ビギナーズ・クラシックス日本の古典参照)

(解説)

平泉を出た芭蕉は、南下して出羽の国へ向かいます。「尿前の関所」は宮城・山形の県境近くにあり、関所の番人に不審尋問を受けています。ここには、義経の妻が出産した時、赤子がここで尿をしたという伝説があります。

芭蕉が泊まった「封人の家」は、母屋を仕切つて馬を飼っていました。馬と人が土間を挟んで同じ屋根の下に同居しているのです。馬の放尿する音が聞こえるのも当然です。寒い北国では、馬と人の同居は普通にみられる光景だったのです。

孫ウオツチング(28)

福田 圭

そんなことは知らなかったのではないでしょう。いずれにしても、旅の困難を乗り越えて、尾花沢、山寺へと向かうという伏線の意味を持つ章です。

芭蕉が泊まった「封人の家」は、母屋を仕切つて馬を飼っていました。馬と人が土間を挟んで同じ屋根の下に同居しているのです。馬の放尿する音が聞こえるのも当然です。寒い北国では、馬と人の同居は普通にみられる光景だったのです。なお、芭蕉の俳句の「尿」は、かつては「し」と読まれていましたが、芭蕉の自筆とされる野坡本では「ばり」と傍訓があり、小児の尿「し」と馬の尿「ばり」とを使い分けていることが確認されました。

「封人の家」のすぐそばに、堺田分水嶺があります。東北地方の背骨とも言える奥羽山脈を芭蕉は横断しましたが、堺田分水嶺は日本海と太平洋とを分ける大分水嶺です。降った雨が日本海の水になるか太平洋の水のなるかの境目を大分水界といいますが、それが山脈の尾根にある場合を大分水嶺というのです。降った雨は最上川と旧北上川に、ここで分かれるのです。芭蕉は「封人の家」に雨で三日間閉じ込められましたが、おそらく、

そんなことは知らなかったのではないでしょう。いずれにしても、旅の困難を乗り越えて、尾花沢、山寺へと向かうという伏線の意味を持つ章です。

六月三〇日(土)は保育園の「七夕祭り」でした。ゼロ歳児から六才児まで順番に舞台で歌や踊りを披露してくれました。光君は三歳一〇か月、葵君は二歳ちようどになりました。光君は「人間っていいな」を歌うことになっていました。保育園へ行く前にお家で歌ってくれました。ところが本番の舞台では、歌わずに一番端でじつと立っているだけでした。家族やお客さんが見ている前で恥ずかしかったのかな?三歳児や四歳児のクラスでは、歌っている子、歌わない子がまちまちです。さすがに、五歳児や六歳児になると、ほぼ全員でそろって歌ったり踊ったり出来るようになっていきます。「恥ずかしいけれども、頑張る」までもう少し時間がかかるのかもしれない。葵君の方は、お兄ちゃんを真似ることで成長が促されるのか、二人目でお兄ちゃんほど手をかけてもらえないからか、舞台の真

ん中の方で、どっしりと構えて舞台度胸満点にお遊戯をしていました。

その晩は近くの三朝温泉に泊まりました。初めての温泉行です。布団の上でジヤンプしたり、夕食の時に、二人でテールプルの周りを走り回ったり、少し興奮気味でした。しかし、ご馳走を前に普段よりはたくさん食べていました。

光君、葵君とお父さん、お爺ちゃんて大きなお風呂に入りました。お爺ちゃんが光君を洗ってあげました。シヤンプーもしましたが、言葉がわかるようになって、目をしっかりとつむって石鹸が眼に入らないように辛抱していました。少し泣きかけましたが・・・少し熱い浴槽にも、最初はつかののを嫌がりましたが、手で試してみても、足先で少し浸かってみて、次に膝まで浸かって、というようにだんだん慣らして身体全体浸かって平気になりました。葵君は湯船につかって泣いていました。言葉がわかるようになると、慣れないことにもチャレンジし易くなるようです。

光君のボキヤブラリーが豊かになってきました。アンパンマンの登場人物の名前や、動物・恐竜の名前など豊富に出ています。お父さん・お母さんの名前はフルネームで言え、保育園の担任の先生の名前も〇〇先生と苗字を言えるようになりました。

宿を後にする時、旅館の前で記念撮影をしましたが、光君は、横を向いたり下

を向いたり、なかなか撮影に応じてくれません。「ちゃんとしなさい」といってもやろうとはしません。三歳児特有の表情なのでしょうか。試行錯誤をしながら、次に会った時には、もう一段成長した姿を見せてくれることでしょう。

編集後記

嘉

残暑お見舞い申し上げます。

毎日暑い日が続きますがお元気ですか。

歳を重ねるほど夏の暑さがこたえてきます。

特に一日中クーラーをかけていると足腰が冷えて具合が悪くなります。

私は、六甲山チャレンジ1000!を晩年の目標にしていますので、時間の空いた日には、極暑の昼間出かけていきます。宝塚駅から塩尾寺までの急坂を上ると汗だくになり、タオルや上着を脱いで絞ると汗が滴り落ちます。

塩尾寺を過ぎると樹々が適当に日陰を作っているので直射日光には当たらないのですが、風がないとやはり暑い。汗が全身に噴出し靴の中も汗で濡れ、もうやっつけられんと思うところが、太平山手前の林道です。ここで着替えて昼飯を食べ気分よく下山します。帰宅してシャワーを浴びて氷水を飲むときの清々しさはたまりません。

伸しては捏ね、伸しては捏ね

一日じゅう水の中にじつとしていて、取りとめもないことを考えるものだ。見たことはないが、日本一の山だという富士山の高さは三、七七六メートルだと聞いたことがある。ある日私は頭の中でこんな実験をした。一枚の紙を何回折れば富士山の高さに達するか。実際には数回も折れば、それ以上折れなくなるが、これは思考実験である。何百回でも折れる。

紙の厚さは0.1mmほどだろうか。半分に折ると厚さは2倍になり0.2mmとなる。二回折ると四倍に、三回折ると八倍である。いいかな。

それでは五回折ると $4 \times 8 = 32$ 倍になる。十回折れば、 $32 \times 32 = 1024$ 倍である。つまり、厚さ0.1mmの紙を十回折ると、その厚さはおよそ、 $0.1 \text{ mm} \times 1000 = 100 \text{ mm} = 10 \text{ cm}$ となる。二十回折るとおよそ、千の千倍に、つまり百万倍になる。 0.1 mm の千倍は 10 cm 、またその千倍は 100 m だ。

そうすると、後五回折れば、初めからの合計で言えば紙を二十五回折れば、その厚さは、 $100 \text{ m} \times 32 = 3200 \text{ m}$ となり、富士山の高さにあと少しとなった。二十六回も折れば六千メートルを超え、

富士山を見降ろすことになる。

これを悪用すると、他人をだまして百万円くらい借りるのは、案外簡単かもしれない。例えば、こんな風に。

「今日一円貸してください。明日は二倍の二円を貸してください。明後日はその二倍の四円を貸してください。そんな風に二倍ずつ、二十日間だけで構いません、貸していただけませんか」

こうして借りる契約ができると、十日目にはおよそ千円を借りられ、二十日目に借りられるのはおよそ百万円だ。借りた合計は二百万円を超えることになる。こりや、返さなきゃいけないね。

表題の、「伸しては捏ね、伸しては捏ね」は、その逆の話だ。田舎には団子汁というものがある。旨いし、腹の足しにもなる。大根、里芋、ごぼう、白菜、葱、人参などの自家野菜に、金があれば豚肉を加える。味噌味をつけ、これに伸しては捏ね伸しては捏ねた小麦団子を加える。団子と言うが実際は平べったいうどん状にして、適当な大きさ(小ささ、という方がふさわしい)にちぎって入れる。

団子汁の味の良し悪しは、野菜の旨さや味噌の味付けにもよるが、最後に味を決定するのは団子の食感である。どこの子や孫も、懐かしさにいつか自分で作ったとき、ばあちゃんの味と違

う、何でだろうと首を傾げるものだ。

小麦粉に適当な量の水と少々の塩を入れ、伸しては捏ね、伸しては捏ね、それを何十回、何百回繰り返すかに団子汁の味はかかっているのだ。

もうおわかりだろう。小麦粉を練って捏ねて、それを伸して広げて、また半分に折り捏ねて、また伸して……と繰り返す。そうすると、捏ねられた小麦粉の均質性というか均質性は、十回で千倍に高まるだろう(均質性が高まるという表現が適当かどうかかわからないが)。二十回では百万倍だ。

実際は十回、二十回などというものではない。団子づくりでも、うどんづくりでも、そばづくりでも、陶器づくりの粘土捏ねでも、手を抜けば、てきめん、味が出る。ばあちゃんは、いつまでも伸しては捏ね伸しては捏ねていたなあ。

鉄だつてそうらしい。伸して捏ね、伸して捏ねた鉄は、うすい鉄が何枚もの層になって、さびても表面から一枚ずつめくられて、全体としてながもちする、とのこと。高い技術で高温短時間につくる鉄が必ずしも万能の鉄ではないらしい。あなふしぎ、あなふしぎ。

以上、今回は伊東光晴著『君たちの生きる社会』(筑摩書房、一九七八年)に道草をした。

俳句

土田 裕

炎天や一票を乞ふ街宣車
訳ありの訳は気にせずメロ
ン買ふ

画家とても適はぬ畑の茄子
の紺

近江路やバスを待つ間の青
田風

ふる里の今も変はらぬ蟬時
雨

影山 武司

啖呵売の声蘇る夏祓
境界の紙垂の揺れみて祇園祭
白足袋の男の闊歩夏祭
青笹をまとふ神輿の波打てり
玉の汗弾く腕の黒光り
山鉾の屋根方よぎる赤煉瓦
屏風絵の青竹さやぐ夏座敷
柳刃を引く手のしなひ夏料理
夏シャツの貝の釦や海の風
初蟬の己が声音に驚きぬ

